

現代ロシア伝統写実主義絵画の魅力(I)

(2005年2月2日付図書新聞小川町画廊刊行の月報『美術新聞』)

2月号記載の拙文を2019年9月20日に改訂・転載)

石井 徳男

近年欧米や日本において、写実主義絵画が見直されているのだという。その背景には、印象派以降の近代フランスの脱写実主義絵画に長い間スポットライトを当て、その対極にある絵画を顧みなかったことの反省や、抽象絵画がデフォルメした具象画の全面排除という進化の過程で、脱写実主義絵画を総じて解り難いものにするなど、癒しの要素を薄めてしまった一方で、鑑賞者の多くが、ストレス社会を反映してか、癒しに長けた絵画を求めようになっていることや、絵画芸術の本道は、デッサンに基礎を置き、高度な写実技法が不可欠な絵画であるべきでないかといった問いかけ等、いくつか理由があるようである。

モスクワに駐在してロシア写実主義絵画の魅力に引き込まれ、爾来15年余りに亘ってその絵画の素晴らしさに慰められている私は(「15年余り」というのはこの拙文の書かれた2005年時点からの起算を示す)、地球規模での美術界の近年の動向を解説したという、ある地方美術館の学芸員のこの話を又聞きして、「それなら是非、ロシア絵画に注目あれ!」と心の中でつぶやいた。それというのも、写実主義絵画が真の発展を遂げたのは、ロシアにおいて他にないという事実は、意外と知られていないからである。

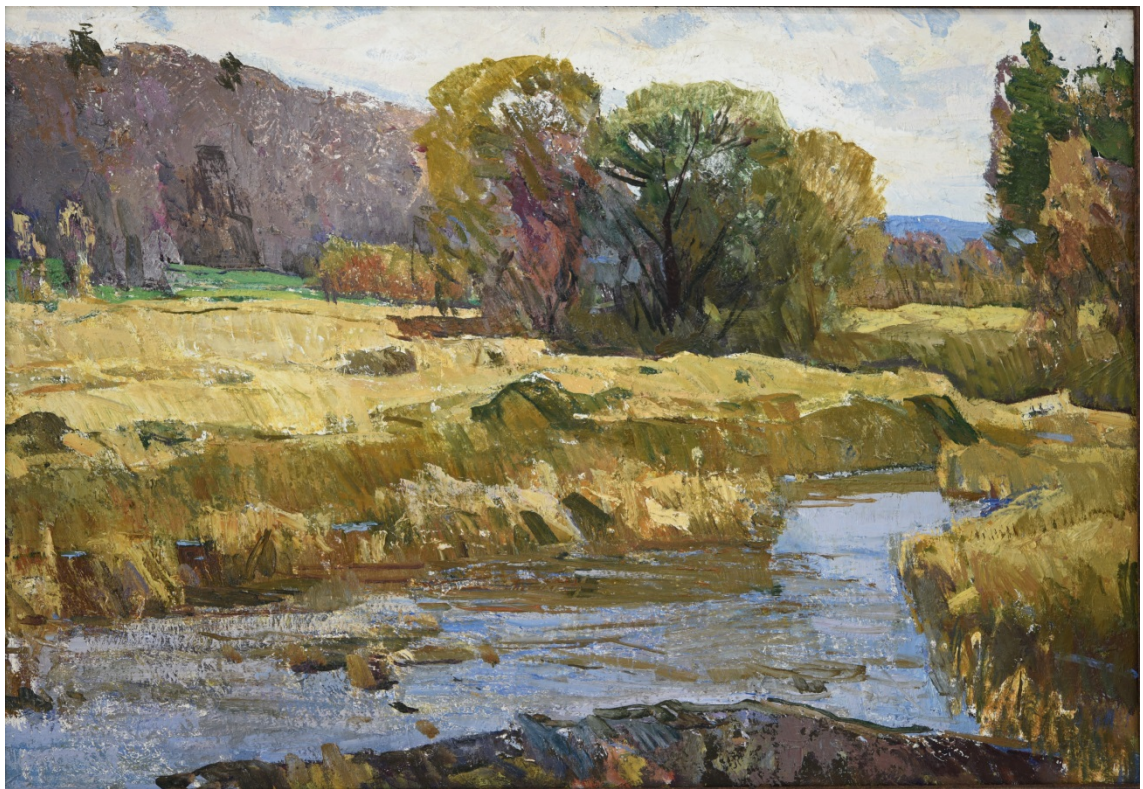
写実主義絵画運動が他国に先駆けて興隆するのは、17世紀後半以降絵画芸術の先駆的役割を担い続けたフランスにおいてであった。コロー(1796~1875)やバルビゾン派の画家たちが19世紀第二四半期に写実主義の風景画を描き始め、19世紀中葉にはギュスターヴ・クールベ(1819~77)が、写実主義絵画の記念碑的な傑作を次々と世に出して、大センセーションを巻き起こす。しかし、その絵画運動も、印象派がそれまでのアトリエでの制作習慣を捨て去り、専ら戸外での写生に切り替えたことが起因となり、途中から脱写実絵画の方へ方向転換したために、つまり、幾世代に亘ることもなく、ほとんどたった一つの、クールベに代表される世代のみで終焉してしまった、その西欧の写実主義絵画は、本格的な発展を見ることは遂になかったのである。

それに対しロシアの写実主義絵画は、1840年代からの胎動期を経て、19世紀70年代より90年初頭にかけて、移動展派絵画運動によって円熟期を迎える。しかし、ご高承の通り、農奴制に象徴されるロシアの後進性を作品で批判し、「批判的リアリズム」と呼ばれた絵画運動も、活動指針として標榜した「ナロードニキ」の革命運動が下火になるにつれて、衰退の道を辿ることになるが、ロシア革命後の1932年にソ連芸術家同盟が発足すると、スターリンのソビエト政権がイデオロギー政策上の観点から写実主義絵画を強力かつ排他的に支援奨励する。国によって画家が写実主義絵画のみを描くように仕向けられたのは、西洋美術史上稀有な現象であり、その善し悪しは別にして、国の手厚い保護の下、半世紀もの長きに亘り連綿と、写実技法を発展させて来たのであるから、現代ロシア写実主義絵画の、特異に発達した芸術レベルがいかほどの高さのものなのか、絵の好きな人なら誰も、

自らしかと確認してみたいと思われることであろう。

現代ロシア絵画というと、イデオロギー色の強い作品を思い浮かべる人も多いのではなかろうか。ソ連時代の写実主義絵画は、「社会主義リアリズム」と呼ばれ、確かに革命や内戦、社会主義建設をテーマにした作品等が主流であったが、それ一辺倒というのではなくて、その一方でほとんど政治色を感じない素朴な風景画が、主流派の一角を占め続けていたのも、また事実であった。時代が下がって、1980年代初期の、ペレストロイカを必要とする時期になると、ソ連崩壊を予告するかのように、イデオロギー的な作品は描かれなくなり、大自然や都市の街並みや、その中にロシア人の生活を描いた風景画が大勢を占めることになる。それらは、純粹芸術の観点から制作された風景画であり、観て解りやすい写実主義絵画であることからして、初めてそれを観る日本人にも馴染みやすい、癒し系の絵画なのである。

具体例として、現代ロシア絵画の作品を一点ここに紹介しておこう。



『川岸』(制作 1960 年代) 油彩・画布 63.5 x 91cm

画家は、I.S. ゴムジコフ(1917~1987)といい、ロシア画家年鑑に印象派画家としてその足跡が記されている。秋の風景画というと、ロシアでは黄金の秋(白樺の黄葉)を色鮮やかに描いたものが多いのであるが、この作品は、黄葉を背景に小川の流れる情景を、全体にくすんだ色調で描き、人生の黄昏という秋のイメージを表現したかのようなようである。一見何の変

哲もない、寂れた風景に美を求める画家の視点に、酸いも甘いも知っている人間の年輪を感じるのは私だけではないであろう。私が特にこの絵を選んだ理由は、ロシアにも日本の「寂」に一脈通じるような、諦観の漂う寂れた美の世界があることを知ってもらいたいと思ったからである。この絵の優れた点は、そうした枯れた味わいと共に、光を大事にする印象派が描いただけに、絵の焦点の川岸を深くえぐる小川は、薄日の中にも射るような光を反射して、清い水が実際に流れているように見えるところであろう。